

武德安民記

五六

場

戰記

庫文閣内			
五函	三三	和	
二架	六一	四	書
	九一	類	
	號		



内閣文庫	
番號	和 33491
冊數	16 (4)
函號	150 5

第三

共十六

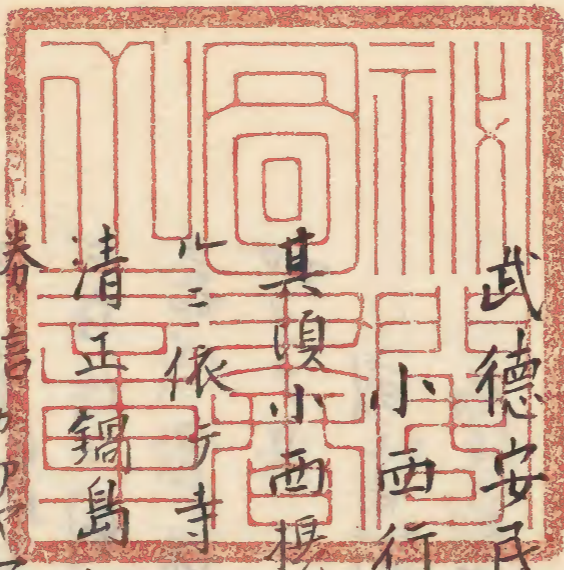


武德安民記卷之五

目錄

- 一 小西行長寺澤廣高与加藤清正以下確執之夏
- 一 神君移于向島夏
- 一 諸將欲擊石田夏并三成与諸將不和濫觴之夏
付加藤左馬助嘉明由緒素生之夏
- 一 神君被制七將之企夏 付利家逝公并三成赴于伏見夏
- 一 神君被宥双方夏 付石田一味諸將會合凝僉議夏
- 一 石田退隱之夏 付鍋島直茂獻盟書夏

武德安民記卷之五



小西行長寺沢廣高与加藤清正以下確執之夏

其頃小西根津守行長ハ朝鮮在陣中ノ遺恨止サ

ルニ依テ寺沢志广守廣高ト胥議ノ加藤主計頭

清正錫島加賀守直茂黒田甲斐守長政毛利一岐守

勝信カアヤマケヲ奉テ一簡ニ呈シ五大老へ捧ケレハ則其

書牘ヲ右ノ四将へ相ワタサル爰ニ於テ四將會合シテ

小西カ罪ヲ箒ヘコレモ訴状ヲ相ト、ノへ三月廿二日ニコレヲ

サ、クシカリトイヘ氏双方ノ可否決セラレタキ故

神君ヨリ大岡薨御以後未タイク程ナラサルニ

淨論尤モ然ルヘカラス互ニ其憤リヲ散シ親交ヲ



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '目録' (Index).

厚クスヘキ由強テコレヲ下知セラル

神君移于向島夏

既ニ

神君向島ノ新宮造畢セシムルニ依テ

二月廿六日御移徒アリ当月十九日吉辰タルニ依リニウツリ

テ今日御移徒ト云シ此寸大坂奉行ノ面々豊後橋辺ニ在テ謁

ヲ執ル各去々秀吉他界ノ刻髪ヲ断テ未ク惣メ伏見

ニ在任ノ刺史小身ノ健士追群泰ノ御ワタマシノ

嘉儀ヲノ述ケルヨリノ弥御威光日ノ昇ルカ

如クナリ

或書曰石田三成カ間諜向島ノ御館へ火ヲカケン

為ニ或夜風烈ノ折カラ思ヒ入ケル處ヲ御家人

蜂屋半之丞コレヲ見付忽チカラメ捕テ

神君へ献シケルコニ於テ乳問セラレ、処ニ右ノ趣白

状シケレハ彼者ヲハ禁獄セラレ白状ヲハ後日ノ

澄批タルヘシトテ則半之丞ニ預ケ玉フト云へ

リ実否分明ナラス

諸將欲撃石田夏付三成与諸將不和濫觴之夏

并加藤左馬助嘉明由緒素生之夏

斯ル処ニ加藤主計頭清正細川越中守忠興福島

左エ門大夫正則池田三左エ門輝政浅野左京大夫

幸長黒田甲斐守長政加藤左馬助嘉明等頃日

一味同心シテ石田治ア少神方へ使節ヲ以テ申

ケルハ吾々朝鮮在陣間粉骨ヲツクシ驍勇ヲ
ハゲシ本朝ノ兵威ヲアラハス其中ニモ蔚山ノ城郭
ヲ立花九近將監宗茂淺野幸長相成ル処ニ大明
人十重甘重ニ取カコミテ既ニ万死ニキハマリシニ清
正西生浦ヨリ兵ヲ殺シコレヲ救ヒシエヘ城兵活ル
丁ヲエタリ此等ノ趣キ福原右馬助直高塔三成カ
垣見和泉守家純熊谷内藏允直陳以上三人ノ軍
監ホヲ本朝ヘ帰シ大閤ヘ言上ストイヘ氏三使依
怙ヲカマヘ此丁悉ク洩達セサルエヘ各ノ勲功等
ク成テ賞セララルニ及ハス爵憤今ニ止ムナシ日臘
帰朝ノ刻忽カレラヲ踏潰スヘキトイヘ氏大閤薨御

以後未タ年ヲ竟ラサルニ騷劇ニ及ニ丁ヲ憚リ
延滞セシメ畢ヌ今願フ処ハ彼三人ヲ生害サセ列
侯ノ憤リヲ散セララルヘシ左ナクハ是非ヲ顧ミス討
果スヘキ由言ツカハス三成情是ヲ聞テ返更シケルハ
使節ノ趣キ寔ニ存シヨラサル旨ナリ其故ハ各朝鮮
ニ於テ軍忠ノ丁三使執達明備ナレハコソ感状ヲ賜
ハル所ナリ重キ賞祿ノ丁ハ大閤ノ御胸中ヨリソ
出ヘキ何ソ三使カ相計フ所ナランヤ然ルヲ今更
カレホカ越度ト称シ罪ニ沈メン丁思ヒモヨラサル
由コタヘケレハ七將大ニ怒テ申断ハル処其甲斐ナキ返
更イワレナク覺ユルナリ此儀ニ於テハ棄置スニキ由

重テ申送り連ノリニ石田ヲフニ潰シ奸臣ノ見エラシメセ
ヨト諸大名ヲ相語フ処ニ赤石近大夫忠政蜂須
賀阿波守至鎮有馬金森織田有乐ホ是ニクミシ
テ兵ヲ殺シ三成ヲ討捕ヘシトテ専ラ其殺ケラソ
ナシケル抑今度七将ホ黨ヲ立テ軍監三人カ讒
言ニ丁ヨセテ三成ヲ七ホサント企テケル其濫觴ヲ
尋ヌルニ先朝鮮征伐ノ魁首ハ大岡ヨリ加藤清正
小西行長ニ命セラレ兩将猛勇ヲ逞シクストイヘ凡
各其巧ヲ争ヒ其間甚タ不快ニシテ恰カモ讎敵ノ
思ヒヲナセリ然ニ石田ハ小西カ断金ノ友ナリシカハ最モ
カレヲヒイキシ時々清正ノ丁ヲ大岡ヘ讒シケルユヘ

清正聊秀吉ヲ勦氣ヲ蒙フル爰ニ於テ清正ハ三成
カ讒奸セル丁ヲ聞テ大ニ怒リ憤リヲフム丁
日久シ又文禄二年ノ夏淺野霜臺黒田如水秀
吉ノ書翰ヲ携ヘ朝鮮ヘ赴キ諸将ヘ兩人渡海ノ
由ヲ告ケ浮田秀家ノ陣營ニ往テ秀吉ノ命
ヲツタヘ夫ヨリ陣屋ヘ歸ル処ニ石田増田及大谷
刑ア少輔吉隆ハ折フシ彼国ニ在陣シケルカ
諸将ニ先立テ長政如水カ許ニ來リ其長程航海ノ
勞ヲ慰ス其時兩人ハ碁ヲカコミテ居タリケルカ
是ニ僻シテ三輩ノ來リ勞ラフ丁ヲ知ス忙然トシ
テ有ケレハ三成ハ増田大谷ニ目合シテ密カニ出ル

トイハ氏兩人ハ猶コレヲ知サリシカ既ニ黑白救テ
後此由ヲ聞テ大ニ驚キ石田増田大谷へ使ヲハセテ
コレヲ謝シケル氏各敢テ是ヲ聞ス且惡口ニソ及
ヒケルステニシテ此輩悉ク皆帰国ノ後三成長
盛吉隆ホ此丁ヲ秀吉へ達シケレハ彈正如水
カ怠慢無礼ヲ大ニ怒リ玉フ其上ニモ彼三人諸人
ニ遭フコトニ右ノ趣キヲモノカタリ甚タ貶シ笑ヒケレハ
此丁世上ノ口碑ニ充テ兩人カ木野狐ホツヤノ為ニ其
心ヲ奪ハレ使節ノ本旨ヲ失ナフ由指頭セサル者ハ
ナカリケル彈正如水尤モ面目ヲ失ナヒ是ヲ憤リ兩人
カ左京大夫幸長甲斐守長政深ク三成長盛吉

隆ヲ怒ミテ殆ント寇讎ノ思ヒヲナセリ惣ノ三成長
朝鮮ニ於テ諸侯ノ勇敢怯弱ヲ監察スル使ニシテ
自カラヤシヲ採テ奮戦ヲ了トスヘキ身ニ非ストハ
イハ氏始終曾テ其功ナカリシカハ他人ノ軍忠ヲ
子タミ凡ソ秀吉へ執達スル旨趣皆公直ナラス諛使
ノ聞へ福島正則加藤嘉明池田輝政ヲ始トシテ
甚タ憤リヲ含ミシニ刺へ三成去年ヨリ神君ニ鉾
楯ノ機漸ッアラハレシ故七将ハ神君へフカク其心ヲ
傾ケシ輩アラレハ弥カレヲニクニ遂ニ此企テニ及へ
リ七将ノ中ニモ池田輝政ハ神君ノ御塔ナリ
加藤嘉明ハ元來御家人ノ筋目アル其故ハ嘉明

カ祖父ヲ如氣ノ中務ト稱シ參州如氣ノ郷主
ツリ如氣ニ任スル故替ク其子加藤三之丞廣明 神君ニ
仕ヘ奉リケルカ永祿六年一向宗ノ徒蜂起ノ寸
彼三之丞モ一揆ニクミシ 神君ヘ敵對ス同七年賊徒
神君ヘ雌伏セシ寸其棟梁タリシ葦原酒井將監
忠尚松平三藏忠就本多孫八郎正信其弟三弥
正重村越孫六郎以下咸諸國ヘ流浪ス此寸三之丞
モ遊客ノ身トナリテ 或ハ村越ト加藤ハ武者 京都本
國寺廟ノ寸ハ柳宮昭ニ屬シ戦功ヲ勵マシ其後
秀吉ニ仕ヘ軍旅ニ從フ備中糺山ニ於テ三之丞嫡
子孫六郎嘉明十六歳 初陣ニ吉川左衛門カ首

級ヲ得タリ柳ヲ瀬軍ノ寸モ嘉明勇敢ヲアラハシ
七本鎗ノ其一人ナリ夫ヨリ次第ニ軍忠ヲハゲマシ
將帥ノ器アルニ改メ登庸セラレ後五位下ニ叙シ
左馬助ニ任シ遂ニ豫州正木ノ城ニ於テ六万石ヲ
領シケルカ又朝鮮在陣中ハツクシノ戦忠有テ
武名ヲ異城ニ輝カシ大岡ノ稱美ヲ被フリ且
四万石ヲ増玉ハリスベテ十萬石ヲ領ス是方シ
ナカラ大岡ノ洪恩タリトイヘ凡 父祖 御家人
タリシ筋目ヲ忘レスシテ專ラ 神君ヘ其志ヲ
ツクシケルコレ越中守明英 神君被制七將之企及
付 利家逝去奇三成赴于伏見夏

カリテ此旨 神君ノ台聽ニ及ヒケレハ七将ニ御使ヲ
以テ今ノ砌私ノ争論甚タ不可ナリ 理非ヲカヘ
リニス堪忍アルヘキ由御下知アリトイヘ氏各ヨリ合
余儀シケルハ最モノ内府公ノ鴻命背キカタシト
ハイヘ氏是程ニ思立タル大義ヲ今更黙スヘキニ
アラス有無ニ三成カ宿所ヲ攻討テ累年ノ爵憤
ヲ晴スヘキトツ牛特メキケル係ル所ニ金沢大納言
菅原 利家ハ既ニ医療ノ術尽テ閏三月三日
遂ニ逝去春秋六十二歳ナリ 高德院ト益ス嫡子肥前守
利長家督ヲ継テ越中
一回如賀半国ヲ領シ二男孫四郎
利政能登国ヲ領ス 者ハ昔シ石田カ寄親ナリワツカ千石ヲ領シケルカ

三成由緒ヲ忘レスノ今ニ於テ相睦マシ然ルニ桑島
此度七将ノ企テヲ漏聞テ死ヲ共ニセント欲シ三成カ
モトニ馳加ハル爰ニ於テ石田ハ始テ此ヲキ、大ニ驚
キ則荷擔ノ大名ホヲ相催ホシ巴カ館ニ楯コモル此トキ
佐竹右京大夫義宣ハ三成カ急難ヲ救ハンタメ伏
見ヨリハセ来リケルカ軍士ヲハ赤ロニノコシオキテ石田
カ宅ニ至リ密カニ謂ケルハ此所ハ土地ヒロクシテ運ヲヒラ
キ難シ其上備前中納言秀家ハモ無ニノ志シナリ
ケルカ七将ニヤ透サレケン殆ントニ心ノキコヘアリトカク伏
見ヘ退ソヘキ由イサメケレハ三成コレニ甘心ノ弟奎助重
成ヲ吾宅ニシ女輿ニ駕メ義宣ト相共ニ宿所ヲ

出ケルカ窮鳥懐ニ入寸ハ獵人コレヲ殺サストイヘリ強
テ浮田ヲ頼マント義宣三成備前島ノ秀家カ亭ニ往
ケレハオスカ旧好愛シカタク人数ヲ加フ是ヨリ佐竹ハ
内府公ト相議スヘキタメニ伏見ニ歸ルトヒロウシテ
石田ヲ携ヘ浮田勢ヲ合セテ伏見ヘソ引取ケルトキニ
閏三月四日ナリ

神君被宥双方支付石田一味諸將會合凝金銭夏
七人ノ面々ハ既ニ石田カ出奔ノ由ヲ聞テ則人数ヲ催
ホシ伏見ヘ来リケレ石田カ亭ハ城内ナレハ先ユウヨ
シテ三成ヲウケトラシ由ヲ 神君ヘ達スル所ニフタヒ
宥メ玉ヒケルハ石田ハ大將ノ寵臣ニテ 諸人コレヲ重シシ

ケルユヘ今ニ其寸ノ余風ニテ各ヘ對シ慮外有ヘシ向後
ハ尤モ其ツシミ有ヘキナリ其上吾治ア少捕ニ異
見ヲ加ヘシバラク其職ヲ出テ佐和山ニ蟄居サス
ヘキノ間必セ將コレニテ慎リヲ散シ大坂ヘ歸参
アルヘシ今更私トシテ干戈ヲ勦カシニタリニ五奉
行ノ其一人ヲ誅シ三成一味ノ諸牧ホト鉾楯ニ及ハ
レシ丁 幼君ヘノ不忠何丁カコレニスグヘキヤト 理ヲ
ツクシテ 仰セツカハサルトイヘ氏セ將ホハ今ニ至リ
此丁 思ヒ止ラシモム子ナリ又 徳川殿ノ御旨ニ
ソムキカタシ奈何セント評議區々ニメ決セサル処ニ又
神君ヨリ 御使ヲ以テ秀頼ハ幼稚ノ間ハ何

分ノ憤リアリ氏堪思有ヘシ此上承引ナキニ於テハ
家康心ナラス三成ヲ援テ防戦ニ及ヘキ由嚴密ノ
御旋ニ七將忽チ承服ノ御請ニソ及ヒケル
諸記ニ曰本多佐渡守 神君ニ留テ曰最モ
三成奸曲紛レナキユヘ諸將ニ憎マレ此ワザハヒニ
アフトイヘ氏味方ニ志シフカキ七將私ノ讎ヲ以テ
カレヲ滅ホサハ大名ホノ驕肆コレヨリ起ルヘシ
御扱ヒアリテ可ナラシカトヒ此度石田ヲタスク
置ル氏此人重子テ乱ヲ起スヘキ奈疑ヒナシ其
寸今般カレト確執ノ七將ハ猶々味方タルヘシ一先
制詞ヲ加ヘテ然ルヘキ由ヲ達ス 神君コノ

言ヲ甘心シ玉ヒ御扱ヒニ及フトイヘリ或曰七將邪
訴ヲカマヘ三成ヲ貶セントスル丁憤激ノイタス所
カ又私智ノアリニ此寸三成ヲ貶スル丁ヲ
神君ヘノ忠義ト思フカ抑亦故アルカ知ヘカラス
トイヘ氏 神君ノ御盛德廓然大公ナルカ
ユヘニ天下ノ正位ニ立玉ヒテ天下ノ大道ヲ行ハン
丁ヲ欲シ玉フ奚ソ私ニ其理非ヲ昏マシ行レン
ヤコレヲ以テ明弁決断ノ上ニ七將ノ邪訴ヲ非義
ニ落サレシ丁最以テ公道ノ御裁許ナラン然
リトイヘ氏強テコレヲ滅メラレハ七將尚憤怒
ヲ増テ猥リニ兵ヲ起シ私ニ三成ヲ伐テ東西ニ

分ラニカシカラハ今秀頼ハ幼弱ニテ天下危キ
ヲ陷ノ時節都鄙忽チ戦国ト成テ太平ノ
朝ハカリカクシ是ヲ以テ邪正ヲ明白ニシ玉ハス
七将ヲ宥メ其企テヲ止ラレ其罪ヲハ乳サレシ
丁是ヨリ時変ヲ察セラレテ正ニ中スルノ道ヲ
ナシ玉フ者カ然ソトイヘ氏此一夏ハ然ク余
丁又三成奸惡ノ者ナリ七将又怒リヲ止ズ三成
ヲ伐ント議シテ騷動尚止ズ是ニ於テ
神君又御思慮ヲ回サレ懇歎ヲ尽シ玉ヒテ
兩度ノ御使ヲ以テ三成ニ忠義ヲサトシ其子
隼人カ後榮ヲ約シ熟ク説諭リニ諫メテ終ニ

退隱セシメ玉フ此人佐和山へ帰ルノ日ハ秀康ハ
シテ其路ヲ送り守ラシメ数月ノ後ハ懇使ヲ
ツカハシ三成カ安否ヲ問シメ玉フ仁ノ至リ義ノ
ツクセルト云ツヘシ果ノ三成退隱ノ後大坂ノ騷動
忽チ鎮マリ天下元ノ如ク治マルア、
神君ノ御盛徳一抑一與一奪皆其道ヲ尽サレ
スト云丁ナシ誠恐々々誰カ感歎セサルヘケン
寔ニ千載ノ美談ナリ世ノ私智弁口ノ者巧名
ハ権謀ノ意ヲ以テ猥リニ 神君ノ御丁ヲ
臆銳シ又徃々筆ニ記ス隨ヒヒ哉愚按スルニ此論
恐ラクハ是ニ近シ

爰ニ於テ 神君ハ中村式ヲ少補生駒雅亦頭
ヲ以テ三成カ方ヘ仰セツカハサレケルハ今度諸將
ノ企テ弒ニ三成憤リタルヘキトイヘ氏幼君ヘノ忠
義ニハ怒リヲ抑ヘ佐和山ヘ下向シ一兩年退隠アル
ヘシ息隼人ヲ五奉行ノ列ニナシ聊カ疎畧有ヘカ
ラス当時天下ノ治乱貴客ノ一心ニアリヨク々遠慮
有ヘキ由ヲ告ラル三成謹テ此ヲ親戚ホニ相談シ
追テ御請ニ及フヘキ由答ヘケレハ 神君再ヒ
本多佐渡守ヲ以テ諭シ玉ヒケルハ貴臣ノ遠慮
最ナリトイヘ氏三成ニ於テハ先君ノ遺訓ヲ隨一
ニ守ルヘキ人ナリシカルニ自己ノ憤リニ任セテ動

乱ノ端ヲ発サルヘキ丁以ノ外ノ不忠ナリ疾ク退
隠アルヘキ由 命セラレ三成則上杉景勝浮田秀
家佐竹義宣小西行長ホノ一味ノ諸將ホニ是ヲ達
シ彼トモカラヲ私亭ニアツメ評議ヲ凝ス処ニ上杉景
勝カ曰化ソセ將ホ全ク私ノ遺恨ガリニテ此企テニ
及フニハアラス 内府ヘノ追従ニ三成ヲ失ハン
ト欲スル丁歴然ナリトテモ只今列坐ノ面々ハ
内府ヲ亡ホサント思ヒ立シ丁ナレハ誓ク三成ハ
内府ノス、メニ任セ佐和山ヘ蟄居セラレヘシ吾々モ
領内成敗ノタメト称シカ子テ暇ヲ乞フキシ丁ナレハ
十日ノ内ニ当地ヲ会シ會津ヘ下ルヘシ義宣モ領

邑へ下向セラレ互ヒニ心ヲ合セ恭勤ノ期ニゾム共
兩人又へテ登ル丁有へカラス然ラハ
内府ヨリ
催促アラシカ其寸シキリニ難澀セハ定メテ兩将ヲ
殊伐セントテ
内府下向有へシ其寸ニ至テ景
勝一番ニ旗ヲ揚ケ
徳川勢ヲ拒クヘシ三成ハ
関西ノ勢ヲ催シ跡ヨリ攻下リ義宣又軍ヲ祭シ前
後ヨリハサミウタバ
内府名将トイヘ氏何ツ本
意ヲ遂サラン然ル上ハ此度敵對ノ部将ホヲ討トラン
丁ハ掌ノ中ナルヘシトシキリニス、メケレハ満坐是
ニ致メ誓約ヲ堅クシ其後三成カ方ヨリ
神君へ貴命ニ應シ佐和山へ徳居スヘキ由ヲソ達シケル

石田退隱之夏付鍋島直茂献盟書夏

同七日ニ石田三成ハ伏見ヲ祭シ佐和山へ下ルヘキニ窺マリ
シカハカノ七将ホコレヲキ、テ路頭ニ待受三成ヲ討捕シ
ト欲シケルトクニ
神君ハ是ヲ察シ玉ヒ結城宰相秀
康神君ノ御子
大岡ノ養子及中村一氏生駒正俊ヲ以テ三成ヲ送
ラセラル故ニ七将ホカリヲ失ナフ下醍醐ノ辺ニ於テ三成
カ領知佐和山ヨリ迎ヒノ士卒来リケレハ三成コハニテ中村生
駒ニ対シ秀康及各コレヨリ歸リ玉ハルヘキ由ヲ演ケ
レハ兩人カ曰
内府ムノ命令重ケレハタイ兩人
何分ニス、ハ氏相公ヨモ歸リ玉ハシ遠慮ナク下リ
玉へト申ケレハ三成則打ツレテ近江路へ策ヲアケケルカ

追分ヲ過テ後三成馬ヨリ下テ一氏正俊ヲ以テ秀康
ハコレヨリ御カヘリアルヘキ由ヲ願ヒケレハ相公ノ曰三成ノ
辞退尤モナリトイヘ氏各ノキ、玉フ如ク佐和山ノ切
通シテ相送ルヘキヨシ、内府カタク、命スル処ナリ其上
内府ハ天性リチギニシカリニモ教令ヲ背ク者アレハ親疎ノ
隔ナクコレヲ憎ムル況ヤ秀康、嚴命ヲソムキ今コレ
ヨリ帰ル者ナラハ一定勘気ヲ受ヘキナリ去ナカラ某
コレヨリ先キマテ見送リテ三成ノ害トナルヘクニハ帰ル
モ有ヘシ今何ノ故ナクシテ父ノ命ヲ背キカヘル丁アル
ヘカラサル由堅ク宣マヒケレハ一氏正俊此旨ヲ三成ニ達シ
駒ヲ早メテ往ケル程ニ関山ヲコヘテ大津松本ヲスキ

膳所ノ向際ニ大木アリ コレ膳所ノ大木トカノ木陰ニ席ヲ設ケ
云ヘリ今ハナシ
三成彼ニ坐シテ又中村生駒ニ対シ相公ヲ始メ兩筆モコレ
ヨリ帰り玉ハルヘシ左ナクニハ幾日モ此処ニ野宿スヘキ由
謂ケレハ一氏正俊此由ヲ秀康ハへ達シトカクニ御帰
少有ヘシ 徳川殿ノ御前ハ兩人コレヲ申披クヘキ由再
三ス、メシカハ相公モ此上ハ強クニ同道ヒンモ無益ナリト
テ秀康中村生駒相トモニ是ヨリ伏見へ歸参アリ之
ニ三成ハ秀康ハニ対シテ此度 徳川殿ノ洪恩生
々世々忘ルヘカラサル由涕泣ノコレヲ謝シ大関ヨリ
拜領シケル正宗ノ服差ヲ相公へ進上スゴトニ三成カ此
度ノ命ハ危カリシ丁ナリシ爰ニ肥前 佐賀ノ城主

鍋島加賀守直茂ハ今度味方ノ七將ホト石田確執ニ
 依テ巷脱紛々トノ大坂伏見惣劇ニ及ケレハ
 神君ノ御館ニ恭候シ言上ノ曰 公今般斬 臣等カ
 ヲメニ急難ニアイ玉ハ、直茂軍兵ヲ帥ヒ救ヒ奉リ
 奮戦ヲ励マスヘシ此忠賞ニ直茂カ死後恩息信濃守
 勝茂ヲ恐レナカラ武藏守殿ニトシク御イツクシミテ蒙ル
 ヘキナリ若又直茂 公ヨリ長寿タルニ於テハ武藏守殿ニ
 対シ忠勤ヲ尽スヘキ由起清文ヲサケレハ 神君御
 感涙ヲ催ホサレ全ク異変アルヘカラサル由 御誓約アリ
 テ甚ク直茂カ心底ヲ謝シ玉ヒケル

武德安民記卷之五終

武德安民記卷之六

目錄

- 一 水野勝茂令伺候于向島御館夏
- 一 神君入于伏見城夏付 諸將帰国并島津父子捧
誓詞夏
- 一 豊国大明神遷宮付 神君御恭詣之夏
- 一 伊集院久直鉾指之夏并島津発兵攻久直之外
墨夏付 神君賜 御書於羽林次將忠恒夏
- 一 神君御恭内被叙正二位夏付前田毛利淳田
上杉等諸將帰于本國夏

- 一 朝鮮軍監等之辯論御裁許并九鬼稻葉及公夏事
- 一 神君渡御于大坂并増田長束逸之夏
- 一 神君賜御書於島津龍伯夏
- 一 丹羽長重蒙 嚴命夏付 柴田左近蒙 御旨至石田三成之居城夏
- 一 大野土方配流之夏并淺野長政蟄居之夏
- 一 浮田秀家功臣等退彼家夏付 大谷吉隆奉恨神君夏
- 一 上杉景勝企叛逆築新城集諸浪人夏
- 一 神君獵于茨木邑夏

武德安民記卷之六

水野勝成令伺候于向島御館夏

粵ニ水野和泉守忠重ト云フ諸侯アリ是ハ故織田備後守信秀ノ麾下尾州小川參州刈谷ノ領主水野右エ門大夫忠政カ末子ニテ 神君ノ御母君傳通院殿ノ庶弟ナリ然ルニ右エ門大夫カ嫡男水野下野守信元ノ家督ヲ継テ故右府信長ヘ仕ヘケルカ天正ノ頃讒間ノ患ヘニアイ死ヲ玉ハリ畢ヌカシテ和泉守忠重ハ此後刈谷ヲ領シ織田信雄ヘ仕ヘ長久手ノ役ニハ 神君ノ麾下ニモ列ナリ信雄落魄ノ後ハ自然ニ大

副(出はシケル抑此人ノ家ハ累代武名ヲ以テ世ニ稱セ
ラレ然モ長子六左エ門勝成初メ藤十郎ト云
後日向守ニ任スハ最モ勇
敢ノ譽レ有シカ天正十二年長久手合戦以後富永半
兵衛ト云ヘル從士又忠重へ勝成カ丁ヲ換言ヲナスヨ
シ漏聞テ甚タ怒リ則甥州菜名ニ於テ渠ヲ誅リシ
シ夫ヨリ遊客ノ身トナリ神君へ仕ヘシヲ子ガイケレ
氏又忠重甚タ勝成ヲニクニテ公勝成ニ謁シ玉ハ生
涯ノ御恨ニタルヘキ由言上ニ及フユへ勝成カ願望ムナシ
ク成テ遂ニ御許容ナカリケル爰ニ於テ勝成鎮西
へ漂泊シケルカ其刻佐々陸奥守成政肥後ノ守護ト

成テ入国シケレハ則成政ニ寄食シ彼国一揆蜂起ノ
成政コレヲ攻撃ノ間勝成魁兵ニ列ナリ諸士ニ抽ンテ
猛勇ヲアラハシケルニ程ナク成政大岡ヨリ死ヲ玉ハリ
シユへ勝成又小西行長ニ附属シ志岐ノ城攻天草本戸
ノ闘ニ粉骨ヲ尽シ勇名ヲ九死ニフルヒ其後所々ヲ
沉淪シケルカ此度向島ノ御館へ夜陰ニ及テ泰候
シ自然ノ丁アラハ忠死ヲトゲン由ヒソカニ台聞ニ達ス
然リトイヘ氏神君ハ又忠重カ往復ノ怒リヲ思召
出サレ勝成ニ謁シ玉ハス遂ニ山岡備前入道々阿弥
ニ命セラレ父子ノ間ヲ和セシメ然レ後御前へ

召出サレケル

神君入于伏見城_夏付諸将帰国并島津

父子捧誓詞_夏

其頃堀尾帶刀吉晴ハ中村生駒ト昏議シテ神君

ヲス、メ奉リ今月十三日

德善院 玄
以当番ノ日

伏見ノ本城へ入奉

ル_夏ニ大忠ト云ツヘシ同十五日伏見ニ在任ノ大小名登城

シテ御移徒ノ賀儀ヲ述ル

或曰伏見本城ハ五奉行輪番ニ守リケルカ德善

院当番ノ寸堀尾方ヨリ縁坐ノ好ヲ以テ城内

見度丁アリト称シ門々ノ鑰ヲ借寄テ遂ニ

神君ヲ入奉リ鑰ヲハ井伊直政ニ渡スト云ヘリ又

一説ニハ德善院ト吉晴昏議シ増田長束ホニ違

シテ曰伏見ノ城衛士多カラヌエへ用心ヨカラス

德川殿ヲ入奉リ然ルヘキ由ヲ達スル処ニ各コレ

ヲ制スルヲ得ス許容シケルカ是ヨリ玄以カ神

君へ志ヲ傾クル丁ヲ察シ密計ヲ示サスト云ク一本

曰神君御移徒ノ宵松平右エ門大夫正久<sub>後正綱
改ム</sub>ヲ

召テ沙屋上ニ登リ居テ若不慮ニ燒立所アル歎ソノ

外怪シキ丁モアラハ言上スヘキ由命セラレル斯テ夜

半過一兩度神君庭上ニ出御ミツカラ正久カ居

タレ所へ礫ヲ投玉ヒ彼眠ラシトヲ誠シメ玉フ其後
仰ニ曰惣ノ人ノ城宅城等へ移リ替リシ寸ハ必シ
モ心ヲユルサヌ者ナルソ仇ヲ含ムヤカラ火攻ヲ用ヒ
時刻ヲ考へ焼立ヤウニハカル丁アルモノナリ故ニ吾
尺テ怠ラサル由 鈞命アリト云ク
斯テ世ノ中皆ソ無為ニナリシカハ朝鮮ヨリ本年
帰朝ノヤカラ各暇玉ハリ食邑へ下向シケリ中ニモ
島津義弘同忠恒ハ盟書ヲ認メ神君へ献シケル
其辞ニ曰

敬白 起請又前書之事

一被對秀頼様御疎畧有間敷之由尤奉存
候夏

一對御父子疎略毛頭有之間敷事

付 拔手表裏有之間敷事

一佞人之族有之而御間相妨輩雖有之直於
申断互相晴可申事

奥 罰文有

慶長四年卯月二日

兩人血判

江戸
内大臣殿

神君モ亦彼父子ニ御神文ヲ授ケラル又加藤清正ハ
忠志ヲツクスノミナラス聊カノリヲモ御旨ヲウカヒケ
レハ御喜悦斜ナラスシテ兼々御養育分ナリシ水
野和泉守息女ヲ清正ニ嫁シ玉フ按ルニ清正此妻ノ腹
ニ女子一人ヲマウク彼女
子終ニハ紀列大納言頼宣々ノ筈中トナル其外清正ニ男女ノ子二人
アリ男子ハ肥後守忠廣ト号シ女子ハ阿部修理亮正澄カ妻トナレリ
豊国大明神迁宮付神君御泰指之夏

四月十八日勅シテ秀吉ノ祠ニ廟号ヲ豊国大明神
ト玉ハリ勅額ヲ樓ニカケラル翌十九日正迁宮
秀頼ノ代泰ハ福島正則及青木紀伊守一矩ナリ
神君モ指玉フ御束帶
御轅其外大小名社泰ス神君ハ夫

ヨリ照光院御門跡へ入御天台論議御聽聞アリ
廿日ニハ豊国ノ祠ニ於テ四坐ノ猿乐アリ浴中ノ男女
群泰ノ見物セリ各堪能ヲ尽シ諸人殆ニト早目ヲ
驚カシケル

伊集院久直鋒楯之夏并島津泰兵攻久直之外墨夏
付神君賜御書於羽林次將忠恒夏

粵ニ当春島津少將忠恒又ハ昂
ト稱ス伏見ニ於テ誅戮シ
ケル老臣伊集院幸侃入道カ嫡男源次郎久直亡父
ノ仇ヲ報ヒシタメ軍勢ヲ相催ホシ日刈莊内都ノ城
ニタテモリ財部安永野々見谷山田志和知高城山

之口勝岡梶山梅北末吉恒吉ホ十三ヶ所ノ外壘ヲ設
ケ国郡ヲ侵シケル処ニ兵庫及美弘入道維新又八郎
忠恒既ニ伏見ヨリ薩久鹿児島へ歸リ入シカハ則大
兵ヲ促シ林鐘ノ初メ日刈赤田へ出張シ軍兵ヲ以テ
恒吉ノ城ヲ攻テ急ニテヲ陷シ其後山田ノ城ヲ攻破リ
敵數百人ヲ討取ケル仍テ此趣 神君へ言上スヘキタメ
家臣喜入大炊今ヲ伏見へソ登セケル係ル所ニ伏見ヨリ
神君ノ使節山口勘兵衛直友下向ノ島津父子カ
氏ニ至リ尊翰ヲ授ケ畢リ彼御書牒ニ曰
御下以後不申入以間以使者申以仍伊集院源

次郎于今城ヲ相拘候由承以爲譜代之家人
身ケ様之儀爲自今以後以間早ク御成敗尤
候雖然江聊尔人数等無異儀様彼作付肝
要以委細者彼使者口上可申候令省略以忠
謹言

七月九日 家康

薩摩少將殿

此取 神君ノ御家人伊奈図書介書牒ヲ呈シ 神君
ヨリ忠恒へ漏暑衣夫ノ根等ヲ玉ハル旨ヲ達シケル其

詞二曰

御下國已來就御見迴不被申以使札被申入以
端百端惟子百矢根或子被進之以謹御音
信近以然者伊集院未居城猶菟以由内府
無御心許江存以于今不致下城以有早御
成致以様江存依御人数亦何成共御用
次第可被申付有以雖被顯直孔候猶自拙
者可申入之也以此委細山口物共申可申上以
不能具以恐惶謹言

七月九日

伊奈圖書介

今成判

薩摩少將様

爰ニ於テ島津一族 神君ノ御厚情ヲ感ニ山口直
友在留ノ間善美ヲ竭ニ是ヲ奔走ス斯テ薩列ノ
使節喜入大炊今モ同月十四日伏見ニ至リ尺素ヲ献
シ口授ノ趣ヲ達シケル処ニ 神君ハ島津父子武威ヲ
以テ速カニ兩城ヲオトシ寇賊ヲ夕討捕ノ段ニ悦ハ
セ玉ヒ同十六日ニ御返簡ヲ与ヘラレ喜入ニ暇玉ハリケル其
寸ノ御答書ニ曰

六月四日之御狀一昨十四日忝著令得其意候
源次郎先手之者菟置以城則時責被數而

人江討捕之由誠以潔白儀共、以弥正御油新
御行尤、以定而深次郎居城裡有同敷以止
去人數等不損樣被仰付可然以尚重而御
吉化右待入以也、謹言

七月十六日 家康

薩广内将殿

神君御参内被叙正二位夏付前田毛利浮田
上杉等諸將歸于本国夏

八月十三日 神君御入洛アリテ翌十四日参内ヲ遂

ラレ正二位ヲ拜シ玉フ
或書ニ此比神君ノ御吹卷ヲ以テ故加賀大納言
利家ニ從一位ヲ贈テ子息利長中納言ニ轉任セ
ラルト云々 實否不分明也

同ノ前田肥前守利長ハ家督相續ノ後分国ノ
制法ヲ抄出スヘキト稱シ帰国ニ赴ムル然ルニ其
比伏見大坂巷説ニ利長ハ徳川家ヲ亡ホウント昼
夜秘計ヲ運ラサレ且同志ノ族ヲ粗是アリ最モ今
度ノ入国モ其故アラシカノ由也、凡聞ス或ハ利長
ハ秀頼主ノ母堂没殿ト密通セラルル稱シ又ハ右

田ニクノレ本国ニ於テ旗ヲ揚ヘキ企テアリ氏云「リソノ
外毛利輝元ハ嗣子甲斐守秀元ヲ代官トシテ大坂
ニナシ置藝州へ帰国アリ浮田秀秀ハ家中騷動ニ
付テ備前へ下向セラル又上杉景勝ハ并水戸城主
佐竹右京大夫義直ハカ子テ石田三成ト昏議ノ来
年ニ至リ上洛ヲ遂スノ神君ノ攻下リ玉ハ一寸一戦
ニ天運ヲ試ミント思ヒ定メシ丁ナレハ領分仕置ノタ
メト稱シ是モ暇玉ハリテ各居城へ下リケル抑前田
利家ハ当春逃公セラレ毛利浮田上杉ハ帰国シケレ
ハ神君ノ外大光最一人モ大坂伏見ニ在勤ナキユヘ奉

行ノ族ヲモ一入 神君ノ御気色ヲ償ハシタメ天下ノ
大小莫悉ク御旨ヲ伺ヒ沙汰セシユヘ大小名モ猶
神君ヲ尊崇スト云ヘ氏敢テ驕移ノ御心毫末モ無
リシカハ諸人弥其徳ニソ懐キケル

朝鮮軍監等之爭論御裁許并九鬼 稻葉
及公事爰

抑朝鮮征伐ノ間太閤ヨリ軍監ヲ命セラレシ輩七
人アリ所謂太田忠輝守一吉^{白杵}城主 福原右馬介直高^{府内}城主
垣見和泉守家純^{富來}城主 熊谷内藏久直陳^{安喜}城主 早川
主馬首長敏毛利伊勢守長高^{佐伯}城主ナリ或モ
利民ア少捕氏アリ

孰レ是ナルヤ 竹中貞右エ門ホナリ 各食邑豊後ノ内タルユヘ世
未考 豊後七人衆ト称ス

然ルニ今夏ヨリシテ朝鮮在陣ノ間依怙具負ノ所
為アリシトニツニ分レ爭論ニ及ヒシカハ遂ニ伏見ノ城ニ於
テ神君是ヲ召決セラル奉行ノ族侍坐シテ理非ヲ
判断ス互ヒニ問答數回ナリシカトカク竹中貞右エ門
毛利伊勢守兩人カ申ス処理ニ寃マリ太田飛彈守福
原右馬介垣見和泉守然谷内藏久早川主馬首等
非分ニ決シ改易ニ及フ又九鬼大隅守嘉隆ト稻葉藏
人通茂爭論コレヲ聞セ玉フ処ニ其意趣ハ此兩人カ相
知近境ナリ稻葉カ采邑ヨリ例年村木薪ヲ出シ

ケルカ是ヲ筏ニ組テ九鬼カ領内ノ川ヲ流シ下ス依テ
古ヘヨリ運上トシテ金銀或ハ村木ヲ嘉隆カ方ヘ送
リケルカ大濶薨去以後通茂是ヲ止メケレハ九鬼大ニ
憤リ公直ニ及ヒシナリ 神君ノ仰ニ大濶在世ノ寸農
高ノ難儀ヲアハレミテ宇治淀川ノ運上咸ク停止セラ
ル勢州ハ遠境ユヘイマタ其沙汰ニ及ハサル間ニ薨逝ア
リ然ル上ハ彼運上出シテ可ナラシカ出サスシテ然ルヘキ
カ最モ弁ヘカメシトハイヘ氏大濶仁愛ヲ以テ近国ノ運上
赦宥ノ上ハ辺鄙ト云氏ソムキ難カラシク 全ク裁断
スルニ非ス兩人カ相对次第ノ由 仰セケレハ徳善院カ

曰此論素ヨリ決シカクキユヘ前々ノ半分ヲ減シ運上ヲ
出シ隅州表引スヘキ由兼日取扱フトイヘ氏其儀ニ應
セサル旨ヲ申ス兩人退散ノ後稻葉ハ大ニ喜ニテ弥運
上ヲ出サ、リシカハ九鬼ハ甚ク 神君ヲ恨ミ憤リツイニ
御敵トナリシナリ

神君渡御于大坂并増田長束惣搜度

付 神君賜御書於島津龍伯度

是ヨリ嚮前田利家ハ在世ノ時叛逆ノ企アリテ同意
ノ族利家ヲ以テ淀殿ニ嫁セシメ秀頼ノ継父ニ擬メ
神君ノ威ヲ壓ヘント欲シケルカ丁成ズノ 利家卒スト

聞ユコレニ依テ去ル五月大坂ノ城ヲ巡視シ玉所ニ新夕
ニカマヘシ槽門ホアリテ其疑ナクハアラス故ニ其子
利長ヲ誅シ前罪ヲ紘スヘシト憤ラセ玉フトイヘ氏細
川忠興伏見ニ至リ色々陳謝セシム石田ハ其才甚深
ケレハ 神君ヲメ利長ヲウタシメ御跡ヲ追テ佐和山ヨ
リ出勢シ一味ノ大名ホヲ催シ立ハサンテウチ奉ラント密
ニ商人氏ニ心ヲ合セ越前ノ國中ニ兵糧ヲソナヘ置且兼々
庄介ト云細工人ヲ招ヨセテ似ヒ金銀若干吹セ軍用ノ
タメニ倉庫ニ結置色々相謀テ肥州利長逆心ノ旨都
鄙ニ於テ巷談止了ナカラシム 神君モ元來故

大納言ノ門櫓ナトノ管ニテ怪シク疑セ玉フ上ナレハ漸ク
驚セ玉ヒ大坂ノ奉行氏ト相議セラレヘキカクメ又幼君
へ重陽ヲ祝シ玉ハントテ九月七日伏見ノ城ヲ御首途樓
船ヲ淀川ニ浮ヘ大坂ニ御着岸石田治アサ補三成カ曰宅へ
入レ玉フ処ニ増田右エ門尉長盛長末大藏太補正家同
候ノ淺殿并ニ利長ト神君ノ間ヲ避ント欲シ詭言
シテ曰明後九日公御登城ノ刻淺野渾正女御出向ヒ
御腕ヲ抑ユニ於テハ大野修理亮治長土方勘兵衛推
朝ヲリ合テ忽チ害シ奉ルヘキ旨内議ヲコラシ畢ヌコレハ
黃門利長淺殿ト密通ノ公ヲ傾ケ恣ニ振廻シ爲ニ

兼テ淺野土方大野ヲ相語ラフニ依テ此企テニ及フ
由トバヲ巧ニ詭シケルユヘ神君モシバク此言ヲ信シ玉フ
翌八日ニハ神君増田カ亭へ入セ玉ヒ夜蘭ニ及フ迄御
閑然アリ還御ノ後長盛又御旅館へ忝扣ス畢竟カノ
換間モ皆石田カ胸中ヨリ起ル所ナリシカ氏長盛正家
カ佞口抜群ナルユヘニヤ御当家ノ功臣等モコレヲ察
セサルコソ薄情ケレカクテ九日ノ早朝神君大坂ノ城へ
入御アリシカ供奉ノ輩ヲ例ニ替リ若干ニ及ヒケルユへ
櫻ノ門ノ衛士ホコレヲ抑ヘ笛ルトイヘ氏扈從ノ健士ホ
耳キカサルカ如ク押通リケレハ警衛ノ諸士モ強テ制ス

ルアタハス既ニノ神君秀頼へ謁シ玉フ寸御家人ホ
虎尾ヲ踏テアヤシニ数輩次ノ間マテ推忝シ刀服差
ヲ帯シ侍坐セリ備奥へ入セ玉ヒ寔殿へ御對談アリ
尚モ老臣近習ノ士席ヲ隔テ伺候シケレ氏元ヨリ大
野土方カ企テモ浮説タルエヘ怪シムヘキ丁更ニ毎リケ
ル浅野長政ハ所勞ニテ出仕セス然ルニ結城宰相秀
康ハ伏見ノ御苗守タル處ニ神君ヨリ伊奈必書
ヲ以テ秀康ハ弥其城ヲ守リ玉フヘシ御内ノ諸將
健士ホハ悉ク当方へ馳来ルヘキ旨ヲ告ラル仍テ秀康
ハ此由ヲ下知ヒラレシカハ諸將諸士忽チ伏見ヲ登シ十

日ノ曉ヨリ追々大坂へ群参セリ翌十一日ニハ神君石
田左助々旧亭へ移ラセ玉フコ、ニ於テ増田長束ホ又
神君へ申ケルハ公秀頼主ト相隔タリ伏見ニ在住
シ玉フエヘ雜説競ヒオコリ世ノ人アンドノ思ヲナサズ且幼
君ノ御為シカレカラサル間願クハ当城ノ西ノ丸へ移ラ
セラレ秀頼主ヲ捕相シ玉フヘキ由ス、メ奉リケレハ
神君モ御許容アリ彼大坂西ノ丸ト申スハ去年マテ
大岡ノ政所住居セラレシ營作ニテ金銀ヲチリハムト云
ヘ氏大廣間ナトナカリシヲ増田長束相ハカリテ工匠數
百人ヲアツメコレヲ經營シ太守ニ准シタル櫓ヲカマヘ

同才八日ニ神君ヲ近シタテマツル是ハ神君ノ奢
侈タル由ヲ披露シ諸將ヲシテ偏執ノ心ヲ生セシ
メシカクメ也一元日神君ヨリ尊翰ヲ薩州ノ
島津竜伯俗名修理大夫義久及羽林次將忠恒ニ贈テ其詞
ニ曰
御折紙披見申候仍源次郎暖之儀ハ
表裏之由曲言候委兵庫頭殿可被
仰以間令省略以思之謹之

九月晦日家席

龍伯

薩摩少將殿

丹羽長重蒙 嚴命夏并柴田元近蒙御
旨至石田三成之居城夏

シカニ前田利長ハ野心ノ旨増田長束カ逸間猶
更シキリナリケル上菴院日ヲ遂テ喧シカリシカハ
十月十三日小松宰相丹羽長重五郎左エヲ大坂西ノ
九、召テ利長隠謀奈覚スルニ於テハ彼居城金
沢へ攻下リ玉フヘキノ間長重ハ先鋒ヲ勤ムヘキ旨
命セラレ于時長重謹テ申ケルハ抑某頃年小松

ニ居住シテ利長ト近境タルユヘ金沢ノ地理彼家ノ
弓夫悉ク知スカシ侍ル上ハ身不肖タリト云ヘ氏魁
首トシテ勿忽踏潰シ奔ヘキ旨潔白御請ニ及ケレハ
神君ノ仰ニ御迎只今ノ一言ノ中忠義勇敢粲然
トシテ其氣象七丈長秀ニ似タル由甚タコレヲ稱美
セラレ吉光ノ眩差ヲ御手ツカラタマハリケル長重
コレヲ拜受シ意氣揚々トシテ退去ス又越前衆
木ノ目峠ノ関所ヲ守リ加久ヘノ往還ヲ改ムヘキ旨
台命アリ 按ルニ木ノ目峠ハ越前ト近江ノ境ニ加賀ト越前ノ
境ハ細呂木ナレハ此所ノ木ノ目ヲハ細呂木ニ作ルキカ
去六日ハ御家人柴田九近ヲ御使節トシテ江ノ依

和山ヘツカハサル処ニ石田三成大ニ悦ビ起請文ヲ調進シ
左近ニモ国光ノ眩差ヲソ与ヘカヘシケル其故ヲ知者
ナシ

大野土方配流之夏并淺野長政蟄居之夏

斯テ大野修理亮治長ハ前田利長ト朋友ナリ土方
勘兵衛雅朝 後河内守ニ任スハ利長ノ從弟ナレハ必定利
長ニ与シ 神君ヲ窺ヒケル其證捉ハアラサレ氏屢御
不審ヲ蒙アリテ遂ニ兩人氏ニ遠境ヘ迂セラレ大野
カ配所ハ奥ノ岩城ニテ岩城但馬守宣隆是ヲ預リ
土方カ配所ハ常ノ太田ニテ佐竹右京大夫義宣カ父修

理大夫美重カ退隱ノ地ナリ五奉行ノ内淺野彈正少
弼長政モ利長ノ縁者ユコレモ御不審蒙テ領国
甲兵へ下リシカ猶モ其心底私ナキ趣ヲ明達スヘキタメ
ニ武久八王寺辺ニ蟄居シケル是ホハ皆増田長束カ
タメ換間ノ患へ遭胸ヲ焦シ魂ヲイタマシムトイヘ凡
誠ニ天命私ナク遂ニ各恩免ヲソ蒙フリケル

或曰細川越中守忠貞ハ利長ノ縁坐其上金蘭ノ
友タルユコレモ彼ハト一味シテ神君へ鉾楯ノ志ア
ル由浮説サカンナリシカハ甚タコレヲ愁へテ則領国
丹後ニ蟄居セシメ全ク異心ナキノ旨使札ヲ以テ

神君ノ長臣ホヲタノミコレヲ拆フル処ニ神君彼老
父ニ位法印出奔ヲ伏見ヨリ召テ如斯書牒ヲ呈
シ忠貞ノ方へ送ハスヘキ旨 命セラレ牒業ヲ玉ヲ出
奔則 御旨ニ應シユレヲ認メ丹後へヲシリケルニ其
文章利長ハヨリタノミル、間彼ハ、与シ 神君へ獻
對スヘキ由ニテヤ有ケン忠貞大ニ驚テ急ニ丹列ヨリ
一騎馳ニ大坂ニハセ登リ直ニ西ノ丸へ至リ右ノ書牒ヲ
獻シ父出奔光菴シテカヤウナル密書ヲ送ルユヘ大ニ
恐入早速泰上セシムル由 光臣ヲ以テ言上ス
神君則忠貞ニ謁シ玉コレハ御辺カ心底ヲウカハシ

父々吾相謀テ凶命法印ニ書セ送ラセケル旨ナリ
素ヨリ異心ナキユヘ早速忝向殊ニ演説ノ趣キ別
神妙ノ由コレヲ感セラレ近来ノ巷説等御雑話
リシカハ忠貞モ甚ク怡悦ノ思ヒヲナシ中納言利長
カ逆心モ必定浮説タルヘシ渠内々三成カ下風ニ立
ンコトヲ嫌フトク々実否ヲ弘サルヘシト云ヘリ是ヨリ
メ利長モ罪断ヲ漸ク免ルト云々

浮田秀家功臣ハ退彼家復付大谷吉隆奉
恨神君夏

爰ニ備前中納言秀家ノ家臣戸川肥後守達安

浮田左京亮成正

後坂崎對馬守改

因越前守貞綱花房志

广守職之等主君ヘ對シ憤リヲ含ミ彼家中甚ク

騷動ス抑此四臣ハ皆浮田ノ家ニ於テ驍勇骯髒ノ

輩ナリシカ秀家愚將ニシテカレヲヲウトニ如斯騷

擾ニ及ヘリ仍テ大谷刑ア少補吉隆榊原式ア太補康

政ホコレヲ取扱フトイヘ氏ツイニ輝破レ彼四臣浮田ノ

家ヲ立退クモシ追手カラハ混雜シテ相戦ハン其

寸ノ相シレシト称シ各髪ヲ裁テ四頂ノ容チニ変ス

此由神君ノ台聽ニ及ヒシカハ榊原ヲ召テ他家ノ

騷動ヲ暖ク然モ了破レヌ汝賄賂ヲムサホリ此了ヲ

執持ケルカ幸ヒ番代トシテ平岩主計貳親吉泰着
スルノ間早々コレニ代リ関東へ下ルヘシト甚ク御気色
アリ後日ニ大谷吉隆コレヲ聞テ 徳川殿ノ康政ヲ呵
リ玉フハ理リナレ氏賄賂ヲムサホリタルカト 宣フ上ハ
吉隆モ是ニフケリタルト思ヒ玉フラン侍ノ身ニ於テ欲
ニフケリタルトノ 仰セハ草鞋ヲ以テ顔ヲ打レタルニヤ
均シカラント大ニ憤リ向後等閑ニコソ打過ケル諸紳
原ハ傍輩ニモ暇ヲ請ハズシテ忽チ策ヲアケ東
国ヘソ下リケル

上杉景勝企叛逆築新城集諸浪人爰

諸モ上杉中納言景勝ハ其臣直江山城守兼蹟石田
三成ト入魂ニシテ其身モ渠ニス、メラレ内々三成ト約
ヲ定メワサト 神君ノ御不審ヲ蒙リ叛逆人トナラ
ント思ヒ立シトナレハ当焮會津へ下向ノ後居城山ノ
内ハ元來旱湿ノ地ニテ水土悪ク上下悉ク疾病ヲ
生シ心神ヲナヤマスユヘ是ヨリ八里ヲ隔テ香指原ト
云フ所へ城郭ヲ移シ築クヘシ是併ラ直江在大坂ノ
節奉行中へ相コトハリタル由披露シテ数万ノ人夫ヲ
集メ若干ノ工匠ヲ招テ彼香指原ニ新城ヲソキツキ
ケル又會津セロノ往還ヲ或ハ堀切或ハ橋ヲカケサセ所

々ニ番兵ヲサシ置又甲冑兵器ヲ用意シ專ラ合戦
ノ設ケヲナシ諸国ニ於テ武辺場教ノ名アル諸浪人
ヲ招キケレハ勇敢ノホマレアル輩 踵スヲ突テ群衆
ス先上方浪人ニハ前田慶次利大水野藤兵衛重俊
上野国ヨリ山上道及上泉主水正俊大高六右エ門某
上総国ヨリハ高城丹下ホ三百余人其外班々ノ輩ヲ
ハアゲテ討フルニ違アラヌ此ノ近国ハ云フニ及ハス忽
チ武江へ偏側へ漸ク大坂へモ達シケレハモトヨリ去年
以来天下危キニシテ縑素悉ク薄氷ヲフム折柄ケレハ
都鄙一同ニ景勝逆意ヲ企ツル由巷議喧シク種々

ノ妄説紛々トシテ貴賤耳ヲ穿チ畢ヌ

或曰會津へ集ル浪人ノ内山上道及ハ首供養三度
マテナシタル覺へノ者ナリ前田慶次ハ故大納言利
家ハノ従カ武勇ノミニアラヌ詩奇ヲ嗜ミ殊ニ紹
巴カ門カニテ連奇ヲ詠ス然ルニ生得異形ヲ好
ミ白四半ニ大ブヘン者ト書ケル差物ヲ用エ此度
モ穀藏院ヒヨツト命ト号シ景勝ニ謁スト云ク

神君獵于茨木邑夏

神君ハ同十二月撰及茨木ニ遊獵シ玉フ細川二位法
印玄旨織田有樂有馬宮内ハ法印金出治ルハ法

印山岡宮内以法中道河原并岡江雪奇前場半
入新且秀頼ノ鷹匠頭佐々後守行政堀田若
狭守重氏ホ供奉セシム彼地ノ代官川尻肥後守
奔走シ奉ツリケル

家忠日記ニ曰是年 白徳公ノ御臺所崇源院殿
伏見ヲ出テ江城ニ下向アリト云云

武徳安民記卷之六終

